



Title	明治期における接尾辞「化」の展開：学術誌における用法を中心に
Author(s)	沙, 広聡
Citation	阪大日本語研究. 2022, 34, p. 95-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88192
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

明治期における接尾辞「化」の展開 ——学術誌における用法を中心に——

The development of the suffix *-ka* (化) in the Meiji era:
With special reference to its use in academic journals

沙 広聡
SHA Guangcong

キーワード：接尾辞「化」、明治期、学術誌、漢語、西洋語

要旨

接尾辞「化」の歴史において明治期は重要な時期である。この時期において、「化」は様々な要素と結合して「～化」という形の派生語を構成し、迅速な接辞化を実現した。「化」の歴史については従来いくつかの研究があるが、江戸蘭学に源流を持つ「化」の接辞的用法が、その延長線上にある明治期の各学問分野においてどのように一般化したのか、また、各分野間にどのような関係があったのか、といったことはまだ明らかにされていない。本稿では、これまであまり取り上げられてこなかった学術誌を中心とする調査を通じて「化」の接辞化の歴史を探り、接尾辞「化」の成立要因とその周辺的な事象についても考察を加える。

1. はじめに

現代日本語において接尾辞「化」は生産性の高い接辞の1つであり、日常生活だけでなく、学問分野においても多用される。その歴史に関して、従来の研究によれば、江戸期の蘭学で「酸化」「炭化」等の「漢字1字＋化」という形の語が造出され、明治中期頃から末期にかけて「化」の接辞化が進み、「日本化」「理想化」「国際化」等、数多くの派生語が生まれた。

このように、接尾辞「化」の歴史において、明治期は重要な時期であるが、この時期についての研究はまだ十分とは言えない。その不足として、江戸蘭学の延長線上にある明治期の学問分野における「化」の使用状況が不明である点、蘭学・英学、自然科学・人文社会科学といった学問間の関係性についての検討がない点が挙げられる。

本稿は、先行研究の成果を踏まえつつ、明治期の学術誌を中心に「化」の使用実態を考察し、実際の用例に基づいて当該時期における「化」の接辞化の歴史を明らかにすることを目的とする。なお、以降の論述において、漢字は原則として現代日本の字体による。

2. 先行研究と問題の所在

接尾辞「化」の歴史の研究として、野村（1981）、趙（2013、2016a、2016b）、楊（2017）がある。

野村（1981）は、明治初期から第2次世界大戦後までの間に刊行された5つの英和辞書¹⁾を対象に、「性」を含む7つの接辞について、その歴史の調査を行なった。野村（1981）は、「化」の辞書登録状況について、『井上英和大辞典』（1915）の時期「からもちいらはじめ、現代にちかづくほど多用されている」と指摘し、その実際の使用について、「明治時代の前半に（中略）つかわれはじめ、後半になって急激に普及の度合いがよくなった」と推測している。

楊（2017）は、1872～92年に刊行された2つの新聞雑誌²⁾を調査した。その結果、「化」を後部要素とする語を23語収集し、そのうち21語が「漢字1字+化」であり漢籍由来のものが多く、残り2語が「漢字2字+化」³⁾だという。このことから、楊（2017）は、日本語における「化」の接辞化は1892年以降のことであると論じている。

趙（2013、2016a、2016b）は、接尾辞「化」の成立をテーマに一連の研究を行なった。具体的には、時代ごとの「化」の使用状況、江戸期以降の「化」の接辞化の様相について詳細に記述した。その中で、明治～大正期における「化」の接辞化について、趙（2016b）は自身のそれまでの研究を振り返り、以下のようにまとめている。

明治中期～大正期の「-化」は「欧州化」「日本化」のような地域名を前接部にとることができ、前接部が徐々に一字漢字から解放されたことを記述した。その後、前接部がさらに解放され、漢語のほかカタカナ語・和語・混成語・漢語句相当が前接部として取れるようになったと結論した。

趙（2016a）によれば、「化」は旧来2字漢語の後部要素として使用されていたが、1895年頃から「漢字2字+化」が出現し、後に「漢字3字+化」が現れた。ただし、ここの「漢字2字」も「漢字3字」も地域名に限る。その後、1909年頃「カタカナ語+化」、1910年頃「一般漢語名詞+化」、1912年頃「漢字表記の和語名詞+化」、「漢語句+化」という流れをもって「化」の接辞化が展開していく。

上述の「化」の展開様相を趙（2016a）の例で示してみると、次のようになる。括弧内の数字は各語の出現年である。

（酸化→）東洋化（1895）→露西亜化（1901）→アメリカ化（1909）→趣味化（1910）

→絵葉書化、対華借款化（1912）

趙（2016a）が分析に用いた資料は、『生物学語彙』（1884）、『改訂増補哲学字彙』（1884）という辞書2種、『女学雑誌』（1885創刊）、『太陽』（1895創刊）という雑誌2種のほか、『朝日新聞』等の新聞類、小説類、西周と福沢諭吉の著作である。

このように、接尾辞「化」の歴史の研究には、野村（1981）のような英和辞書を用いたものもあれば、楊（2017）のような新聞雑誌を用いたものもあり、趙（2013、2016a、2016b）のように複数の分野から「化」の使用状況を観察し、分析したものも存在する。いずれも接尾辞「化」の歴史に関する重要な研究である。

しかし、明治期における「化」の接辞化を究明するには、さらに次の2つのことが必要であると思われる。

第1に、学術誌等の専門資料における使用状況を把握することである。「化」の接辞的用法は蘭学（化学等の分野）で生まれたものであり、「化」の接辞化は日常生活よりも専門的な学問分野の方で先に進んだことが考えられるためである。

第2に、蘭学・英学、そして自然科学・人文社会科学といった学問間の関わりを確認することである⁴⁾。接尾辞「化」の歴史は断片的なものではなく、これらの学問が分野を超えて相互に関連して成り立っているものだと考えられるためである。

以上の考えに基づき、本稿では明治期の学術誌を中心に「化」の使用実態を調査する。また、加えて、自然科学系の学術用語集、先行研究で取り扱われた人文社会科学系の西周、福沢諭吉の著作についても調査し、考察する。

3. 調査資料と考察対象

3.1. 調査資料

調査に用いる資料を表1、表2に示す。表1は雑誌類、表2はその他の資料である。

3.2. 考察対象

接尾辞「化」の歴史を研究するにあたり、その成立に関係する「化」を後部要素とする新語・訳語（例：「気化」「社会化」）を考察対象とする。また、「化」の接辞化と関連すると思われる表現（例：「化糖」「一種の宗教に化せられしこと」）にも着目しながら分析を行う。

なお、接尾辞「化」は、ある要素に付いて、「その要素が表す物事や状態、性質に変える／変わることを表す。そのため、明治期の新語・訳語であっても、「前部要素が表す物事や状態、

性質に変わる／変わること」と解釈し得ないもの（例：「孵化」「帰化」）は、基本的に対象外とする。

表1 雑誌

分野		資料名	創刊年	調査対象年
自然科学	化学	東京化学会誌	1880	1880～86、1890、1894
	医学	成医会月報	1882	1887～89、1891、1893
	生物学	植物学雑誌	1887	1889～94
		動物学雑誌	1888	1895～96
	物理学	電気学会雑誌	1888	1888～91
人文社会科学		明六雑誌 ⁵⁾	1874	1874～75
		哲学雑誌	1887 ⁶⁾	1892～99
総合	東洋学芸雑誌		1881	1881～82 1886～88（第61～87号）
	女学雑誌		1885	1887（第71～90号） 1888（第91～100号、第121～142号） 1889～1892（第160～319号） 1894～95
	東京人類学会雑誌		1886 ⁷⁾	1886～95
	太陽 ⁸⁾		1895	1895、1901、1909

表2 その他の資料

分野		資料名	刊行年・成立年
自然科学	化学	化学対訳辞書	1874
		化学訳語集	1891
	医学	増訂医語類聚	1878
人文社会科学		西洋事情他 ⁹⁾	1866～98
		生性発蘊他 ¹⁰⁾	1873～86
		哲学字彙	1881

4. 明治期における「化」の接辞化の様相

結論を先に述べると、明治期における「化」の接辞化の状況は、大きく次のように整理することができる。すなわち、1887年頃以前は主に化学と医学という自然科学において新語が見られ、1888年頃以降は人文社会科学における「化」の接辞化が増加する。したがって、以下では、1887年頃を境に明治期を二分して議論を進める。

4.1. 明治前期——自然科学における蘭学の継承と発展

この時期に見られる「～化」の例を表に整理したものが表3である。人文社会科学系の資料の記載欄は背景を暗くしている。また、「酸化（鉛）」「硫化（炭素）」「塩化（石灰）」のような

表3 明治前期における新語・訳語「～化」

年	資料名	新語・訳語	分野
1874	化学対訳辞書	酸化等	自然-化
1878	増訂医語類聚	酸化等、同化、液化、軟化、肉化、気化、膿化、脾化	自然-医
1880	東京化学会誌	酸化等	自然-化
1881	東京化学会誌	酸化等	自然-化
	時事小言	土化	人社-政
	哲学字彙	同化、分化	人社-哲
	東洋学芸雑誌	酸化等	総合
1882	東京化学会誌	酸化等	自然-化
	東洋学芸雑誌	酸化等	総合
1883	東京化学会誌	酸化等、液化	自然-化
1884	東京化学会誌	酸化等、液化、軟化、硬化、脂化	自然-化
1885	東京化学会誌	酸化等	自然-化
1886	東京化学会誌	酸化等	自然-化
	東洋学芸雑誌	酸化等	総合
	東京人類学会雑誌	酸化	総合
1887	成医会月報	酸化等、硬化、脂化	自然-医
	東洋学芸雑誌	酸化等、液化	総合
	女学雑誌	酸化	総合
	東京人類学会雑誌	酸化、土化	総合

化学名¹¹⁾に関わるものは便宜上まとめて「酸化等」として示す。

表3に見る通り、明治前期において、「化」に関する新語・訳語は化学と医学の2分野に集中している。また、化学分野における「化」の接辞化は、前述したように、「酸化（鉛）」といった化学名関係の語と密接に関係しており、特殊な展開を見せている。一方、人文社会科学系の資料では「化」を用いた造語が少ない。

このことから、明治期における「化」の接辞化は自然科学において先に進行したことが分かる。なお、この現象が生じたのは、一時代早く、江戸期に隆盛したいわゆる蘭学からの影響が大きいと考えられる（詳細は後述）。

以下、化学名における「化」と、化学名以外の「化」の2つの場合に分けて、明治期の自然科学における蘭学の継承と発展について述べる。

4.1.1. 化学名における「化」

化学名における「化」の使用は、「化」の接辞的用法の萌芽として見逃すことができない。

前述したように、「化」を後部要素に持つ語が、造語として頻繁に使われ始めたのは江戸期であった。この時期における「化」を含む造語の例を確認したところ、表4に示すようなものが見られた¹²⁾。

表4 江戸期の造語「～化」

年	資料名	造語
1774	解体新書	溶化
1820	叢桂亭医事小言	膿化
1821	黴瘡新書	軟化
1822～25	遠西医方名物考	焦化、熟化、酸化
1834	遠西医方名物考補遺	気化
1835	植学啓原	炭化
1837～47	舎密開宗	粉化、磷化、硫化
1849	病学通論	類化

上表を表3と合わせて見ると、次の2点分かる。

- (1) 「酸化」「硫化」といった化学用語は、江戸期の蘭学に由来するものである。これらの語は、蘭学の延長線上にある明治期の自然科学で継承され、そのまま用いられている。
- (2) 江戸期の学者らは翻訳上、日本語に既存の概念（「酸」「炭」等）を用いて造語する傾

向にあったため、「化」は生産性が比較的弱く、もっぱらほかの漢字と結合して2字漢語を形成していた。しかし、明治期に入ると、化学分野において「化」は英語接尾辞 -ide の翻訳に用いられたことがきっかけで、生産性が著しく高まっていった。

化学分野における蘭学の継承と発展に関して、主張の裏付けとなる資料として『化学対訳辞書』(1874)を引用する。

... oxide(s) 酸化... ... peroxide 過酸化... ... hydride 水化... ... sulphide(s) 硫化...
 ... cyanide ^{シヤン} 蔵化... ... ferrocyanide 鉄蔵化... ... chloride(s) ^{クロール} 格魯児化...
 (宮里正静『化学対訳辞書』、1874年)

上記の語が示すように、明治期の化学資料では、蘭学由来の「酸化」等が受け継がれ、それに加えて、「水化」「鉄蔵化」「格魯児化」等の訳語が大量に作り出されている。英語の原語と日本語の訳語を対照すると、-ide が「化」で翻訳されることが多いことが分かる。

「～化」の前部要素は、全て漢字表記になっているが、翻訳方法によってそれぞれ異なる性質を持っている。全体的に、「水」のような既有語は少数であるのに対し、「蔵」「格魯児」のような、原語をそのまま漢字で音写したもの、また「鉄蔵」のような、意識と音訳の組み合わせで作られたものが非常に多く見られる。

「化」と -ide の関係については、『化学対訳辞書』(1874)より2年早く刊行された『化学要論』(1872)に、既に次のような記述がある(下線は筆者による。また、句読点は適宜調整した。以下同様)。

化「アイド」(中略)〔O〕_{酸素}及ビ語尾ニ「イン」ヲ履セル諸元質、他物ト和シテ、其聚合体、酸ナラザルトキハ語尾ニ化字ヲ履ス。例スルニ、酸化加爾叟母_{即チ石灰}、各魯林化嘸叟母_{即チ食塩}ノ如シ。(化「アイド」(中略)酸素及び語尾が「イン」で終わる諸単体が他物と化合し、その化合物、酸でない時は語尾に「化」の字を付ける。例えば、酸化カルシウム、クロリン化ソディウム(=塩化ナトリウム)等である。)

(杉田玄端訳述『化学要論』巻之一、「第七課 化・和・酸塩・及ビ様塩」、1872年)

この記述は、後に日本初の化学論文誌『東京化学会誌』に掲載された「化学命名論」という記事で次のように紹介されている。これによって、-ide が「化」で翻訳されること、また、化学名における「化」の接辞化が西洋語の翻訳に起因することが再確認できる。

化学要論ハ命名ノ法大抵右述ル所ト相似タリ。而シテ英語尾ノideニ化字ヲ用ヅ、uretteニ和字ヲ用ヅ、又ateヲ酸塩トシ、iteヲ様塩トス。（『化学要論』は命名法は大抵右に述べたところに似ている。そうして英語語尾の-ideに「化」の字を用い、-uretteに「和」の字を用い、また-ateを「酸塩」とし、-iteを「様塩」とする。）（甲賀宜政「化学命名論」『東京化学会誌』第1帙、1880年）

以上のことから、「化」の接辞的用法は江戸蘭学に源流があること、明治期に入ると、英学の隆盛とともに化合物の命名法において英語接尾辞-ideと結び付けられるようになり、化学分野における学術用語の体系化に重要な役割を果たしたとすることができる。

4.1.2. 化学名以外の「化」

表3から「酸化」等の化学名に関する語を除けば、表5のようになる。「*」を付した語は江戸期の造語である。

表5 化学名以外の新語・訳語「～化」

年	資料名	新語・訳語	分野
1878	増訂医語類聚	気化*、軟化*、膿化*、同化、液化、肉化、脾化	自然-医
1881	時事小言	土化	人社-政
	哲学字彙	同化、分化	人社-哲
1883	東京化学会誌	液化	自然-化
1884	東京化学会誌	軟化*、液化、硬化、脂化	自然-化
1887	成医会月報	硬化、脂化	自然-医
	東洋学芸雑誌	液化	総合
	東京人類学会雑誌	土化	総合

分野別に見ると、まず、人文社会科学系の資料に現れた造語として、福沢諭吉『時事小言』（1881）の「土化」（農民と商人が士族になること）、井上哲次郎等編『哲学字彙』（1881）の「同化」、「分化」の3語が挙げられる。しかし、後の2語は同書では「同化（生）」「分化（生）」と記されているように、収められたのは哲学書であっても、生物学に関する用語である。したがって、純粋な人文社会科学系の造語は「土化」のみである。一方、自然科学系の資料では、「気化」「軟化」といった蘭学由来の語が使用されると同時に、「同化」「硬化」等の新語が作り出されている。さらに、総合系の雑誌に現れた例として、『東洋学芸雑誌』第4巻第71号（1887）の「液化」と『東京人類学会雑誌』第18号（1887）の「土化」（石器が劣化して土になること）があるが、いずれも自然科学系の用語と認められる。

異なり語数に着目すると、自然科学の文脈に出現した語は、「気化」「軟化」「膿化」「同化」「液化」「肉化」「脾化」「分化」「硬化」「脂化」「土化」の11語、人文社会科学の文脈に出現した語は「土化」の1語である。このように、自然科学において、「化」は結合語の後部要素として一定の生産性を見せている。ただ、これらの語はもっぱら「漢字1字+化」に限られるため、「化」の前部要素の種類は少ないと言える。

ここで、1点留意すべきことがある。それは、「～化」の使用に関して、自然科学と人文社会科学はそれぞれ独立しているのではなく、相互に影響し合っていることがあるということである。その証拠として、医学・生物学で使われ始めた「同化」における人文社会科学の文脈での使用が考えられる。「同化」は、早くも奥山虎章訳『医語類聚』（1872）に英語 assimilation の訳語として見られる。同じ assimilation の訳語として、西周『生性発蘊』（1873）では「化同」または「引類化同」と訳されているが、『哲学字彙』（1881）になると「同化」が生物学に関する用語として採用された。これを契機に、それまで自然科学の学術用語として使用されてきた「同化」は、人文社会科学の文脈でも多用されるようになり、「化」の人文社会科学での接辞化にも貢献した（詳細は後述）。

4.1.3. まとめ

以上、「～化」を化学名の場合とそれ以外の場合に分け、明治前期における「化」の接辞化の状況を確認した。その結果、江戸期の蘭学に発祥した「化」の接辞的用法は、まずその延長線上にある明治期の自然科学において継承され、発展したことが確認された。そのうち、化学名以外の「化」は、自然科学において一定の生産性を見せたのみならず、それによる造語が人文社会科学へも及び、明治期の接尾辞「化」の成立と一般化に影響を与えた。

4.2. 明治後期——人文社会科学における「化」の急速な接辞化

1888年頃以降、「化」の接辞化は急速な展開を見せ始めた。江戸期の造語や化学名関係の語、さらに重複して出現した語¹³⁾を除外してこの時期の新語・訳語を整理すれば、表6のようになる。背景を暗くしてあるのは、人文社会科学関係の語が見られる資料である。

表6 明治後期の造語「～化」

年	資料名	造語	分野
1888	成医会月報	鹼化、乳化、胃素化	自然-医
	女学雑誌	人化	総合
1889	成医会月報	癌化、石灰化	自然-医
	女学雑誌	黄化、悪化、淳化、鹹化、古化、鮮化、俗化、靈化、活人化、西洋化	総合
	東京人類学会雑誌	欧化、旧化、日本化	総合
1890	東京化学会誌	糖化、膠化、硝基化、炭酸化	自然-化
	植物学雑誌	ペプトン化	自然-生
	電気学会雑誌	磁化	自然-物
	女学雑誌	混化、聖化、清化、善化、トノサマ化	総合
1891	化学訳語集	ジアゾ化、オゾン化	自然-化
	成医会月報	骨化、軟骨化	自然-医
	植物学雑誌	厚化、リグニン化	自然-生
	女学雑誌	老化、凡化、神化、魔化	総合
	東京人類学会雑誌	黒色化	総合
1892	植物学雑誌	灰化	自然-生
	哲学雑誌	物化、活化、分化	人社-哲
1893	実業論	商化	人社-経
1894	東京化学会誌	濃化	自然-化
	哲学雑誌	客観化	人社-哲
	女学雑誌	温化、哲学化、朝鮮化	総合
1895	哲学雑誌	現化、具象化、具体化	人社-哲
	女学雑誌	純化、洋化	総合
	太陽	蛹化、紅化、理想化、内地化、東洋化、支那化	総合
1896	動物学雑誌	石化	自然-生
	哲学雑誌	世間化、道德化、精神化、優趣化、世俗化、深酷化、組織化、実体化、希臘化	人社-哲
1897	哲学雑誌	我化、体化、禽獣化、人格化、反故化、精気化、個体化、人間化、実利化、深刻化、民俗化	人社-哲
1898	哲学雑誌	和化、本質化、永久化、神聖化、仏教化、符号化、国民化、通俗化、主観化、直覚化、凡神説化、欧羅巴化	人社-哲
1901	太陽	銅化、硅化、真化、美化、肉化、露化、平凡化、個人化、国民化、正教化、石墨化、東京化、独逸化、英国化、江戸化、露西亜化、基督教化、日本語化	総合
1909	太陽	詩化、米化、日化、空想化、趣味化、明日化、文学化、性格化、芸術化、平民化、上流化、属僚化、電氣化、大学化、滑稽化、天来化、政治化、問題化、表象化、劣等化、夢幻化、北米化、仏国化、京都化、米国化、アメリカ化、ヨボ化	総合

以下、「～化」の前部要素の語種と、人文社会科学における「同化」の多用を中心に論を進める。

4.2.1. 前部要素の語種

明治後期には、「化」に前接する要素として、従来の漢語（1字）、外来語のほか、和語等も現れるようになり、「化」の接辞的用法の拡張が見られる。具体的な内訳は、表7の通りである。なお、漢語系前部要素には自立的なものと結合的なものがあるが、ここでは便宜上、いずれも語として扱うこととする。

表7 前部要素の語種分布

語種		異なり語数	比率 (%)	例
漢語	1字	49	35.0	糖、美
	2字	65	46.5	石灰、具体
	3字	2	1.4	凡神説、日本語
和語		1	0.7	トノサマ
外来語		5	3.6	ペプトン、ヨボ
混種語		1	0.7	基督教
その他		17	12.1	米、京都
合計		140	100.0	

表7を見ると、明治後期では「化」と結合するものの中で、圧倒的な勢力を持つのが漢語であり、116語と全体の82.9%を占めている。前期の造語——化学名を除く全てが2字漢語である——と比較すると、「～化」の前部要素として漢語の割合はやや減少している。しかし、全体の異なり語数から見れば、後期は前期（「同化」といった新造語9語）より13倍も増加しており、「化」の結合語の後部要素としての高い生産性を示していると言える。また、漢語の中でも、1字、2字、3字ごとに大きなばらつきが見られる。この時期における2字の前部要素は、1字を超えて語種全体の半数近くを占め、飛躍的に増加している。一方、3字はわずか2例であり、1.4%にとどまる。

漢語に次いで多い語種は外来語であり、3.6%の割合を占める。その中でも、自然科学における「音訳語＋化」の造出が目立ち、当該分野において原語重視の志向が強まったことを物語っている。これについて、典型的な例として「胃素化」の「ペプトン化」による入れ替えが挙げられる。表6を見ると、「胃素化」と「ペプトン化」はそれぞれ1888年と1890年の語であり、両者が類義語的關係にあることは以下の2文から分かる。なお、化学大辞典編集委員会編『化

学大辞典』(共立出版、1963)によれば、「ペプトン」は「タンパク質のアルカリ、酸あるいは酵素による部分加水分解物」(369頁)である。「胃素化」と「ペプトン化」の両語は「タンパク質を酸や酵素などで分解しペプトンにすること」を意味すると考えられる。

倘シ胃ノ刺戟著シキトキハ、牛乳ニ石灰水ヲ配スルカ、若クハ胃素化^{ママ}牛乳ヲ用フ。(もし胃の刺激が強い時は、牛乳に石灰水を配合するか、もしくはペプトン化牛乳を用いる。)

(木村壮介「米国諸病院ニ於ケル腸窒扶斯症ノ療法叢談」

『成医会月報』第75号、1888年)

又他ノ理由ヨリ牛乳ニ堪ヘザル者多キガ故ニ(中略)「ペプトン」化牛乳ヲ以テ之ヲ換フルモ可ナリ。(またほかの理由により牛乳不耐の者が多いため(中略)ペプトン化牛乳でこれを代用することも可能である。)

(T.K.「胃病ト関連スル一定ノ腸疾患ノ治療法ニ就テ」

『順天堂医事研究会雑誌』第227号、1896年)

また、わずかながらも和語と混種語の出現も見られる。「和語+化」の例は次のようなものである。

日本未だ平民主義のトノサマ化し去らさるものあるを大賀す。(日本はまだ平民主義の殿様化し去らない者がいることを大いに喜び祝う。)(「御殿様、御前様」『女学雑誌』第230号、1890年)

表7に示した「その他」は、趙(2016a)で触れられた、国名、地域名の類である。これらの固有名詞を「西洋」「内地」といった地理的範囲を表す一般名詞と合わせて「地名」と呼ぶことにすると、1895年以降、「地名+化」という類型の造語が頻繁に作られるようになったと言える。

なお、「地名+化」が多く生まれた背景には、日本の近代化に伴う国家建設の需要、外交・植民事情に対する関心の高まりがあると思われる。このことを示す用例として、以下のようなものが挙げられる。

段々日本人ノ北海道ノ開拓事業ガ進デ来マシテ、日本人ガ大勢入り込デ、風俗習慣ナドガ日本人ニ化セラレテ……日本化シテ仕舞フ有様ニナツテ居リマスシ(後略)(だんだん日本人の北海道の開拓事業が進んできまして、日本人が大勢入り込んで、風俗習慣などが日本人に化されて……日本化してしまう有様になっていますし(後略))

(小金井良精「あいぬノ骨格標品ノ説明」『東京人類学会雑誌』第72号、1892年)

之に反して、邦人、外国婦人を娶れば、自から其家庭を洋化せしむ。故に我新領地を開かんとせば、宜しく我婦人をして多く新領地内の清人に嫁せしむべし、彼等をして日本化せしむるを得べし（後略）（一方、邦人が外国の婦人を娶れば、自ずからその家庭を西洋化させる。故に我が新領地を開こうとすれば、我が婦人を多く新領地内の清国人に嫁がせるのが良いだろう、そうすれば、彼らを日本化させることができるだろう。）

（「女学子の新領地開発意見」『女学雑誌』第410号、1895年）

アレは加州沿岸に彷徨（うろつ）している歐洲移民の北米化した特種の北米人で、華盛頓の子孫たる北米人は、最つと公平で、最つと思慮がある。（あれはカリフォルニア州沿岸をうろついている欧州移民の北米化した特殊な北米人で、ワシントンの子孫である北米人は、もっと公平でもっと思慮がある。）

（安孫子久太郎「北米人の長所短所」『太陽』第15巻第4号、1909年）

明治後期、特に1895年前後は、日本が近代化に取り組んでおり、対内的には近代統一国家を建設し、対外的には外国や外交、植民への関心が高まっていた時期であると思われる。そうした中、「化」の前部要素として国や地域を表す語彙が多く見られるようになったのではないかと考えられる。

4.2.2. 人文社会科学における「同化」の多用

前述したように、「同化」は1881年の『哲学字彙』に取り入れられて以来、数多くの人文社会科学の文脈で使用されるようになった。一部の資料における「同化」の使用状況を示したものが表8である。括弧内の数字は当該資料における総使用数である。

表8 人文社会科学の文脈における「同化」の使用状況

年	資料名	使用数	使用例
1881	哲学字彙	1 (1)	Assimilation <u>同化</u> (生)
1890	女学雑誌	6 (6)	天地を躯体の内に <u>同化</u> して
1893	哲学雑誌	17 (17)	耶蘇教を印度に <u>同化</u> せしめ 仏教も儒教も憲法も皆我邦に <u>同化</u> したり
1894	女学雑誌	8 (8)	此天然の力に <u>同化</u> して 日本の <u>同化</u> 力
1901	太陽	9 (12)	彼等をして勉めて清国民に <u>同化</u> せしめ 泰西の感情思想を我に <u>同化</u> して
1909	太陽	65 (72)	北米の風習に <u>同化</u> しないといふ議論 宗教と文学をどういふ風に <u>同化</u> さすべきか

表8が示すように、「同化」は1890年代以降、宗教、文化、社会に関する文脈で多用されていた。これを表6の語、及び、前節の「地名＋化」に関する考察と照合すると、「同化」が使用された表現は、場合によっては、「～化」と同義または類義的な関係を持ち、両者は入れ替え可能である。実際、「北米に同化し→北米化」や「我邦に同化し→日本化」等の類義表現は、同一文章または同時代の資料で複数見られる。このことから、自然科学において作られた「同化」は、人文社会科学に受け入れられたのみならず、明治期における「化」の接辞化にも貢献したと思われる。

これに関連して、「化」の接辞化には句から語への短縮現象が複数見られる¹⁴⁾。「ヲソンニ化スル→オゾン化」「西洋風に化したる→西洋化」「宗教に化せられし→宗教化」「東京に化し→東京化」等がその例である。

4.2.3. まとめ

明治後期における「化」の接辞化について、「化」による造語の増加や、前部要素の多様化、さらに、従来、句で実現された表現が「～化」で表されることなど、様々な側面から分析を行った。とりわけ人文社会科学の文脈において、「化」は結合語の後部要素として非常に高い生産性を有し、急速な展開を見せた。この展開の裏には自然科学からの影響が見られる。その根拠として、自然科学において先に作られた「同化」が哲学を通して人文社会科学に受容され、当該分野における「化」の接辞化に積極的な影響を与えたことが考えられる¹⁵⁾。

5. 明治期における「化」の接辞化の要因

以上の考察から、明治期における「化」の接辞化の様相の概略を確かめることができた。なぜそのような様相を呈したのか、その要因の1つには、文体的な影響が考えられる。

日本語の文体は、明治期半ばまでは漢文（中国語）と深く関わっており、いわゆる漢文訓読体が多用されていた。しかし後期になると、言文一致運動の高揚とともに西洋語（欧米語）の影響があらわになり、欧化現象が生じた。

この点について早くに着目したのが国語学者の山田孝雄であり、彼は『日本文体の変遷』（藤本等編（2017））¹⁶⁾の中で次のように指摘している。

明治時代の普通文は、そのあるものは終始殆どかはらざる如くに見ゆるもあれど、その大勢よりして見れば、明治の御宇四十五を略二分して、前期と後期と分つべく、その前期と後期との間には頗る趣を異にせる点あり。
（藤本等編（2017：252））

また、この「前期」と「後期」について、以下のように評価している。

惟ふに明治前期は思想上よりいへば、西洋崇拜の時代なり、学術上よりいへば洋学模倣の時代なり。教育上に重んぜられしは英漢数の三学に限られし時代なり。文章上よりいへば、漢文口調全勢の時代なり。然るに、明治廿年頃より（中略）わが文体もおのづから新方向をとりて旧時と面目を異にするに至りぬ。その一つは洋文の趣を加へて漢文直訳の口調をしりぞけ、新しき思想を盛るに適せしめむとせしものなり。（藤本等編（2017：266））

山田によれば、「明治廿年」すなわち1887年頃は、日本語の文体が、漢文調主体であった状態から欧文的要素を吸収し、新たな方向へと変化した節目の時期である。この変化は、「化」の接辞化にも影響を及ぼしたと考えられる。つまり、「化」の接辞化の歴史において、漢文と西洋諸言語が重要な影響を与える要素になると思われる。その影響とは、次の2点に集約される。

- （1）語構成上、「化＋結果要素」という漢文由来の語法は、日本語における「化」の接尾辞化が進んだ中でも長く続いており、接尾辞「化」の歴史を構成する重要な一要素である。
- （2）西洋語から日本語への翻訳は、「～化」の造出に積極的に影響し、日本語における接尾辞「化」の成立と一般化に寄与した。

以下、（1）（2）の順に、例を示しながら具体的に述べていく。

まず、（1）についてである。筆者が調査した限り、19世紀末までの中国語において、「化」は主に単独で、または2字漢語の一部として使われる。また、「化」は「変化」の意味で使用された場合、変化の結果となるもの、すなわち結果要素との結びつきが常に「化（＋為／成）＋結果要素」と動詞句になっている。「化為氣」（気体になる）「化石」（石になる）がその例である。

漢文の影響を受けた明治期の日本語には、「（沸湯）化シテ汽ト為ル」や「（木）化して石となる」など、漢文を書き下したような表現が多く存在する。また、田野村（2021）で指摘されている、「化石」のような中国語の動詞句を直読によって一語化したものも見られる。これらの表現は、「化」の接辞的用法がまだ発達していない時期に特に目立つ。特に後者においては、「化」が日本語の文脈において結合語の前部要素となり、独特な発展を遂げたとと言える。

実際、本稿の調査対象となる1870年代、1880年代の資料において、「化＋結果要素」の造語が複数見受けられ、既に述べた「化同」（4.1.2）「化石」のほかに、「化糖」「化肝」「化骨」「化灰」が挙げられる。これらの語の一部は、西洋の概念を輸入する際に作られた訳語であり、と

りわけ医学に関するものが多い。その要因として、医学分野が江戸蘭学に源流を持つため、漢学・漢文からの影響が大きかったことが考えられる。

しかし、より注目されるのは、同一文章中の、同じ結果要素によって構成された「化～」と「～化」の混用である。『成医会月報』第118号（1891）に載った「化骨性筋肉炎ノ実験」という記事では、次に示すように「化骨」と「骨化」の両方が使用されている。

頸背ノ筋ハ化骨シ（中略）背部ノ浅在諸筋ハ漸次ニ化骨ニ陥ラントシ（中略）下肢ノ筋ニハ化骨セル所ナシ。上肢ノ筋モ軀幹ヨリ行走シテ附着セルモノノ他ニハ化骨セル所ナシ。（後頸部の筋は骨化し（中略）背部の浅在諸筋は次第に骨化に陥りかけ（中略）下肢の筋には骨化したところはない。上肢の筋も軀幹から行走して付着したもののほかには骨化したところはない。）

頸背ノ諸筋モ亦骨化セントシ（中略）肩胛関節周囲ノ筋肉骨化シ、左側ニ於テハ大円筋ハ全ク骨化シ、濶背筋ハ一部骨化セリ。大胸筋ノ縁モ亦一部骨化シ（後略）（後頸部の諸筋もまた骨化しかけ（中略）肩胛関節周囲の筋肉が骨化し、左側においては大円筋は完全に骨化し、濶背筋は一部骨化した。大胸筋の縁もまた一部骨化し（後略）

（「化骨性筋肉炎ノ実験」『成医会月報』第118号、1891年）

記事のタイトルにある「化骨」も合わせて計算してみると、同記事において「骨化」は「化骨」と同じ比率（いずれも5回）、かつ同じ意味で使われていることが分かる。この現象は、「化」の漢文に基づく従来の用法が弱まり、接尾辞としての新たな用法が発達しつつあることを示している¹⁷⁾。

「化～」と「～化」の混用現象には、語構成における漢文と日本語の相違、競合が表れていると思われる。しかし、このような競合は少数であり、「化」を前部要素とする造語は多くは観察されない。筆者の推測にとどまるが、漢文素養のある明治期の知識人にとって、「～に変える／変わること」を「～化」で表現することは江戸蘭学に由緒のある造語行為であり、かつ、日本語の語順に一致する比較的自然的な造語法だと認識されていたのではないかと考える。結果的に、「化～」の造語は日本語における漢文受容の中で起こった例外的な出来事にとどまり、他方、「～化」の用法は一般化の方向へ展開していったと思われる。

次に、(2)に記した問題について述べる。明治期の「化」の接辞化の様相を概観すると、1880年代末以降の人文社会科学における「化」の急速な接辞化が特徴的である。その中でも、1896年頃以降の哲学分野における「漢字2字以上+化」の大量造出が目立ち、哲学分野における接尾辞「化」の使用は普及速度が極めて速かったと言えよう。これらの現象の裏には、西洋語の影響があると思われる。

「漢字2字+化」の早期の造語として、『女学雑誌』第168号（1889）に見出された「活人化」がある。

故に高尚なる道德もしくは純正なる宗教などを信ぜらるる人々が、其の高潔なる志想を凝らして活人化せしめ、之を紙上に躍立せしめて一篇の小説とし、読者が一笑一泣一喜一憂するのうちに端なく此の神線に接せしむるの工夫甚はだ大切なりと思はる。（故に高尚な道德もしくは純粋な宗教などを信じられる人々が、その高潔な志向を凝らして擬人化させ、これを紙上に躍立させて一篇の小説とし、読者が一笑一泣一喜一憂するうちに端なくこの神線に接させる工夫は甚だ大切だと思われる。）
（撫象堂主人「証詞の百合花」『女学雑誌』第168号、1889年）

「活人化」と意味的に近いものとして、同誌に複数回出現した「人化」がある。早期の1例を次に挙げる。

故に詩人が万物をパーソニフハイ（人化）すると云ふは未だ可ならず、寧しろ詩人は、彼の万物と云へる一種の人々と交通交際して、之が為に代言する所の深切なる文人である。（故に詩人が万物を擬人化するということはまだできず、むしろ詩人は、彼の万物と言える一種の人々と交流して、このために代言するところの思慮深い文人である。）

（「将来の和歌」『女学雑誌』第134号、1888年）

上記のような例から、1887年頃以降に生じた日本語の文体変化とその特徴の一端が見えてくる。山田孝雄が指摘した通り、この時期における日本語は、従来の漢文訓読体の勢力が弱まり、新たに西洋語、とりわけここでは英語の要素が加わってきている。このような背景の下で、personifyの表す概念に対応する日本語として「人化」や「活人化」が作り上げられたと考えられる。

『哲学雑誌』第11巻第113号（1896）に見られる、「化」を後部要素に持つ語に着目してみると、9語のうち半分以上が次の目次に由来している。

第二章 天然の単一神教

- 一 三の主要なる神境界
- 二 一切諸神の本体同一なり
- 三 宗教的関係の道德化（此種の訳語を世間が許さん事を希望す）
- 四 単一神教の没落

第三章 単一神教の擬人的精神化

- 一 ヘラス教に於ける単一神教の美的優越化
- 二 ローマ教に於ける単一神教の実利的世俗化
- 三 ゲルマン教に於ける単一神教の悲壯道徳的深酷化

第四章 単一神教の神学的組織化（後略）

（姉崎正治「ハルトマン宗教哲学」『哲学雑誌』第11巻第113号、1896年）

この目次は「ハルトマン宗教哲学」という論文に付されたものであり、付録として当該号の最後に掲載されている。論文冒頭に「今翻訳せんとする所は即此書なり」「未定稿」とあるように、この「ハルトマン宗教哲学」という論文は、宗教学者の姉崎正治がドイツ人哲学者エドゥアルト・フォン・ハルトマンの著書 *Religionsphilosophie*（1882）を翻訳する際に書かれた原稿である。「～化」を原語と対照させる形でまとめたものが表9である。

表9 原語と訳語

原語	訳語
Moralisirung	道徳化
Vergeistigung	精神化
Verfeinerung	優越化
Säkularisirung	世俗化
Vertiefung	深酷化
Systematisierung	組織化

ドイツ語原語は、3語が接頭辞 ver-、また6語全てが接尾辞 -ung を有している。国松孝二他編『独和大辞典』第2版（小学館、1997）によれば、ver- は、名詞や形容詞を動詞化させる機能を持つ接辞であり、多義の1つとして「結果」を表す。一方、-ung は「動詞の語幹につけて女性名詞（-/-en）をつくる」接辞であり、「…すること」という意味を表す。

「道徳化」の後ろに「此種の訳語を世間が許さん事を希望す」と書いてあるように、翻訳者の姉崎は「漢字2字＋化」という整然たる造語パターンをもってこれらのドイツ語を翻訳しているが、こうした訳語が当時の人々に理解され納得されうるかという点においては懸念する様子を見せた。

しかしながら、着目すべきは、西洋語の翻訳が日本語の新文体の成立、また「化」の接辞化の成立に重要な影響を与えた、という事実である。山本（1971）では西洋文体、特に英語が日本語に及ぼした文法的影響について、明治末期以来の研究をもとに、単語・語法・修辞法・文

章記号という4つの項目を立てている。その中で、単語レベルの影響として接辞を指摘し、「化」に関しては「近代化」(-nization)と「大衆化する」(-fy)を挙げている。山本(1971)ではこれ以上の論説はなされていないが、筆者が調査したところ、さらなる裏付けとなるものがあった。本稿の調査対象には入っていないが、英書 *The Evolution of Industry* (1895) の翻訳書『工業進化論』(1896)では、「社会化」「博愛化」「市町化」等の「化」による派生語がいくつも見られる。これらに対応する原語を確認したところ、socialise、humanise、municipalise等、いずれも英語接尾辞 -ise を有する語であることが分かる。以上の観察を通して、ドイツ語にせよ、英語にせよ、同じ接辞を持つ語を翻訳する際に同じ造語法、ここでは「～化」が意識的に使用されていた可能性が考えられる。このことから、西洋語からの翻訳が、日本語における接尾辞「化」の成立と一般化に影響を与えたと考えられる。

6. おわりに

筆者の着目した2つの問題——江戸蘭学に源流を持つ「化」の接辞的用法が明治期の学問分野においてどのように一般化したのか、また、それをめぐって各分野間にどのような関係があったのか——を念頭に、明治期の学術誌等を調査し、そこに見られる「化」の接辞化の歴史を考察した。その結果を要約すると、「化」の接辞化は明治前期まで蘭学の伝統を受け継いだ自然科学において進行し、後期になると西洋諸言語の翻訳という文脈にも支えられて人文社会科学において急速な発展を遂げたということになる。

注

- 1) それぞれ高橋新吉等編『改正増補和訳英辞書』(1869)、柴田昌吉・子安峻編『附音図解英和字彙』(1885)、井上十吉『井上英和大辞典』(1915)、岡倉由三郎編『研究社新英和大辞典(初版)』(1927)、岩崎民平等編『研究社新英和大辞典(四版)』(1960)である。
- 2) 1872年から1877年にかけて刊行された『東京日日新聞』と1887年から1892年にかけて刊行された『反省会雑誌』から一部を抽出し、調査を行なった。
- 3) 楊(2017)は「漢字2字+化」の語として、1876年の『東京日日新聞』に現れた「軽炭化」「人民化」を挙げている。しかし、これらを「漢字2字+化」の語として扱うことの妥当性については検討の余地がある。まず「軽炭化」について、原文では「軽炭化水素」という形で出現している。楊(2017)ではこれを「軽炭化+水素」と捉えているようであるが、正しくはおそらく「軽+炭化水素」である。すなわち、「軽炭化」は「漢字2字+化」ではない。また、「人民化」についても、元の文脈を辿れば、これは1語ではなく、単なる文字連接であることが分かる。以下にその箇所を示す。句読点と破線は筆者による。

然ルニ学資課賦ノ方法ヲ定メ、教化ヲ簡易ニシ、教員ヲ督属スル等、其力ヲ茲ニ竭スニ至テハ、彼是一徹ニシテ、日ニ進ミ月ニ熾ンニシテ、其成業ヲ奏ス止マザレハ、人民ニ化ニ趣主、亦以欧米各国ニモ愧チサルヘシ。

(「寄書」『東京日日新聞』3月7日、1876年)

- 4) 自然科学と人文社会科学は、それぞれさらに「化学」「医学」等、「哲学」「社会学」等と細分化することができる。しかし、「化」はこれらの学問分野ごとにまったく異なる意味用法を持つのではなく、隣接分野において共通の使用や変化を有しているように思われる。したがって、本稿では、「化」の接辞化のプロセスをより明確に捉えるために、明治期の学問を自然科学と人文社会科学の大きく2分野に分けることとする。そのうえで、「化」の接辞化の様相を記述し、さらにこの2分野間の関係性について検討する。
- 5) 『明六雑誌』には「化学改革の大略」のような自然科学に関する記事もあるが、哲学、教育、法律、言語等に関する論説がほとんどである。今回は人文社会科学系のものについてのみの調査した。
- 6) 『哲学雑誌』は1887年に創刊された『哲学会雑誌』が1892年に改題したものである。
- 7) 『東京人類学会雑誌』の前身誌は『人類学会報告』(1886)と『東京人類学会報告』(1886～87)である。これら2雑誌を合わせて調査する。
- 8) 『明六雑誌』(1874～75)、『東洋学芸雑誌』(1881～82年分)、『女学雑誌』(1894～95年分)、『太陽』(1895、1901、1909)からの用例収集には、国立国語研究所『日本語歴史コーパス』を利用した。
- 9) 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション「デジタルで読む福澤諭吉」を用いて『西洋事情』(1866～70)をはじめとする福澤諭吉の人文社会科学系の著作42点を調査した。
- 10) 『西周全集』第1巻「哲学篇」(大久保利謙編、1860)を対象に、『生性発蘊』(1873)をはじめとする西周の著作7点を調査した。
- 11) 本稿では化合物名に使われる「～化」と化学反応を表す「～化」を総称して、「化学名」と呼ぶことにする。なぜなら、一部の「～化」は2通りの意味用法を持つためである。例えば、同じ「酸化」と言っても、「酸化鉄」(英語: iron oxide)のような化合物名に使われるものと、「酸化スルトキ」のような、名詞もしくはサ変動詞語幹として機能し、「酸化」そのもの(英語: oxidize/oxidization)を表すもの、という2種類が考えられる。同様の例として「炭化」「塩化」等が挙げられる。今回は詳細に意味用法を区分することは避け、化学物質や化学反応を記述する際に使用される「酸化」等を一律して化学名の語として扱う。
- 12) 今後研究の発展に伴い、明治期以前に既に存在していた語が見つかる可能性もあるだろうが、本研究においてはさほど問題にならないと思われる。以下も同様である。
- 13) 異体字「礆」「鹼」についても表記を「鹼」に統一し、最も早く現れた例のみ残すことにした。
- 14) 接尾辞「性」の歴史にも類似の現象が見られる。例えば、「石鹼ノ如キ性→石鹼性」「感受ノ性、感受スルノ性→感受性」等である。
- 15) ただし、あくまでこれは考えられる根拠の1つに過ぎない。このほかにも両分野の関連を裏付ける要素はあるのではないかと考えているが、これについては今後の課題としたい。
- 16) 山田の手稿『日本文体の変遷』は藤本等編(2017)として翻字、出版された。以下の引用は同書による。
- 17) なお、少数の「化+漢字1字」は医学分野においては未だに見られる。日本の医学論文データベース『医中誌Web』で「骨化」と「化骨」の使用状況を確認したところ、「化骨」は「骨化」ほどではないが、出現数として少なくはない。ただし、ここ数年の論文タイトルに限って見てみると、「骨化」がほとんどであり、「化骨」は1980年代以降、論文タイトルからその姿が消えたように思われる。

参考文献

- 田野村忠温(2021)『『化石』の成立と展開』国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究四十』、pp.63-80(和泉書院)。
- 趙麗君(2013)「漢語接尾辞『-化』の成立と展開」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第35号、pp.89-110。

- 趙麗君（2016a）「漢語接尾辞『-化』の成立と意味用法の拡張についての研究」（岡山大学博士論文）.
- 趙麗君（2016b）「接尾辞『-化』の新用法の成立と展開」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第42号、pp.29-47.
- 野村雅昭（1981）「近代日本語と字音接辞の造語力」『文学』第49巻第10号、pp.22-34（岩波書店）.
- 藤本灯・田中草大・北崎勇帆編（2017）『山田孝雄著『日本文体の変遷』本文と解説』（勉誠出版）.
- 山本正秀（1971）『言文一致の歴史論考』（桜楓社）.
- 杨超时（2017）《近代中日词汇交流与“的”“性”“化”构词功能的演变》（中国社会科学出版社）.

（博士後期課程学生）
（2021年8月19日受付）
（2021年9月4日掲載決定）